

# 青春スクロール

## 母校群像記

### 恩師の言葉が指針／学校行事に全力

日本の高度成長を担った平塚江南(以下、江南)OBの系譜は、現在も経済界の第一線に引き継がれている。

日本郵便副社長伊東敏朗(63、1969年卒)は、江南の体育祭後に、男子だけのキャンプフアリアを企画。共学化はしたものの女子の活躍が目立っていたので「男子だけで何かを作り上げよう」と呼びかけた。「『あしたのショー』の連載が始まり、東大入試がなくなる時代。僕らも時代の熱気に包まれていた」

### 平塚江南高校 ③



産業貿易センター社長太田嘉雄(61、71年卒)はバスケット部に入部してすぐ、ひざを痛めた。その後勉強に専念したが「江南にはガリ勉の印象はなく、文武両道が似合う校風だった」。浜銀総合研究所社長も経験、「横浜銀行江麗会」の会長を務め、母校との縁は深い。



キンモクセイが香ると、江南の体育祭を思い出すという遠藤

中野の直筆の手紙と、亡くなった恩師の句集を大事に持っている小泉



太田の1年下に、NEC社長遠藤信博(60、72年卒)がいる。片道4キロを自転車通学した。全校一丸となる行事や、授業の面白さに感動。「君たち、分かれ道があったら、必ず厳しい方を選んだよ」と語った恩師の言葉が人生の指針だ。携帯

学校行事に全力投球した清水



電話の小型無線基地局の新興国市場を開拓し、NECを世界トップシェアに押し上げた。

日本たばこ産業(JT)社長小泉光臣(56、76年卒)は国語の期末試験で、中野重治の詩の解釈に納得できず、中野本人に手紙を書いた。すると中野から小泉を支持する返事。意気揚々と職員室に乗り込むと、試験を出した国語教師は「中野先生のような大家が、18歳の君に情熱を持って手紙を書いてくれた。小泉君、うれしいね」と喜んで

くれた。

小泉の友人に、エーザイ副社長清水水初(56、76年卒)がいる。陸上競技会で1500メートル走り、文化祭では英語劇、体育祭では10メートルもあるガリバーが立ち上がる仮装をやった。「とにかく一生懸命にみんなで努力すると、何でもできる気がした」。エーザイで海外法人立ち上げに奔走し、米国社長時には売り上げを3倍にした清水の原点だ。



リース用タイヤの設計者から社長になった野地

77年卒)は、厳しい練習で知られる応援団で団長を務めた。昼休みも放課後も筋トレやランニングに費やし、川の両岸に分かれて声を出し合った。「応援とは、頑張れという相手以上に、自分が頑張ること」と打ち込んだ日々を思う。昨年の「青春かながわ校歌祭」に応援団仲間と参加、指揮を執った。

江南同窓会(真壁佐一会長)は、「助っ人バンク」として卒業生による在校生へのキャリア講座などを実施。小泉や野地らも講師登録している。広報委員会手がけるHP(<http://www.konan-dosokai.jp/index.html>)には、講演の様子や校歌祭の報告などが満載。